# た なかぼり 田中堀遺跡

(川辺郡川辺町上山田田中堀)

## 位置と環境

遺跡は、町の中心部から南西へ約6km離れた、大谷川上流左岸側に広がるシラス台地の一角に位置する。遺跡付近の標高は120m、同じ台地上には旧石器時代から縄文時代を中心とした遺物の散布が点々と認められ、まだ多くの遺跡が眠っているものと思われる。

#### 調査の経緯

この遺跡は、畑の深耕や町道の拡幅工事等によって、古くから多くの遺物が採集されてきた。その中に、南九州の縄文時代後期中頃を代表する土器、市来式土器の成立を探るための良好な資料も含まれていることが判明し、調査を計画したのである。

発掘調査は、本田道輝が中心となり昭和56,59,60年の3次にわたって遺跡の一部(計218.5㎡)で 実施した。

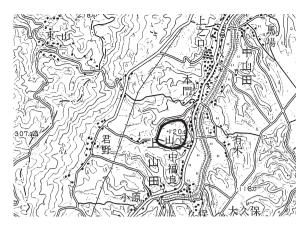
### 遺構と遺物

3次の調査で、縄文時代早期〜晩期および古墳時代の遺構や遺物が発見された。ただし、縄文後期の遺構保存のため、それより下層は一部深堀りしたにすぎず、そこも縄文早期の集石の存在により以下の掘り下げを中止した。よって、旧石器時代遺跡の有無については、現在のところ未確認である。また、周辺は中世山城としても利用されているが、調査地点ではその時期の遺物や遺構は全く検出できなかった。

検出遺構としては、縄文時代早期の集石1基、後期の集石1基、土坑13基、古墳時代の土坑(部分検出で全形不明)などを確認した。

縄文時代早期の集石は、その細かな時期は不明であるが、前平式や桑ノ丸式などの細片が周辺調査区で出土しているところから、円筒形貝殻文土器のいずれかの時期のものと考えられる。

後期の遺構は、平坦面から西側谷へ向けての傾斜 面へと地形が変換する付近に密集して存在する。土 坑は円形で、径1m前後、深さ30~50cm程度のもの が多い。大半は後期前半の指宿式土器の時期で、こ

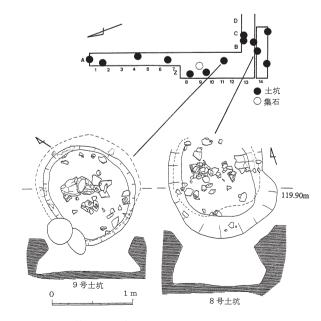


第1図 田中堀遺跡の位置

のうち断面形がフラスコ状をなすものは、内部から 炭化した木の実が多く出土するものもあり、貯蔵穴 と判断した。9号土坑のようにその中央部から完形 土器2個が支え合うようにして出土した例もある (第2図)。集石は掘り込みをもつもので、やはり指 宿式土器の時期に所属する。

縄文時代の遺物としては,多量の後期前半の土器とそれに伴う少量の石器が,谷へむかう傾斜面から出土した。おそらく傾斜面を利用した遺物廃棄箇所であろう。そのほか早期~中期・晩期の土器が少量,晩期の石製品が1点出土している。

後期前半の土器は、指宿式土器(第3図1~4)を中心に、貝殻による擬似磨消縄文土器(第3図6)や出水式土器(第3図5)が混じり、上層部で



第2図 遺構配置の状況と8・9号

は市来式土器成立期の土器である松山式土器(第3図7~9)が指宿式土器と混じりながら少量出土する。典型的な市来式はほとんど出土しないところから,後期中頃には人々はこの地を棄ててほかの場所へと移動しているようである。

後期前半の石器は、土器の出土量と比較すると極めて少なく、石斧(小形のノミ形石斧を含む)、石鏃、石匙、磨石、敲石、石皿等がある。石鏃や石匙には粗製のものが目立つている。また、突起部を三条作り出した特殊な石製品の破片1点も出土している。そのほか、縄文時代後期の遺跡によく認められる土器片を丸く形作った土製品も出土量は多い。

#### 特徴

谷へむけての傾斜面を利用した遺物廃棄,平坦面 から傾斜面へ地形が変換する付近(平坦面端部)を 利用した土坑群など,縄文後期前半の人々の日常生活の中での地形利用の一端を知ることができる。また,薩摩半島における後期前半の土器組成と,後期中頃へむけての土器の変化の様相を知ることができる貴重な遺跡である。

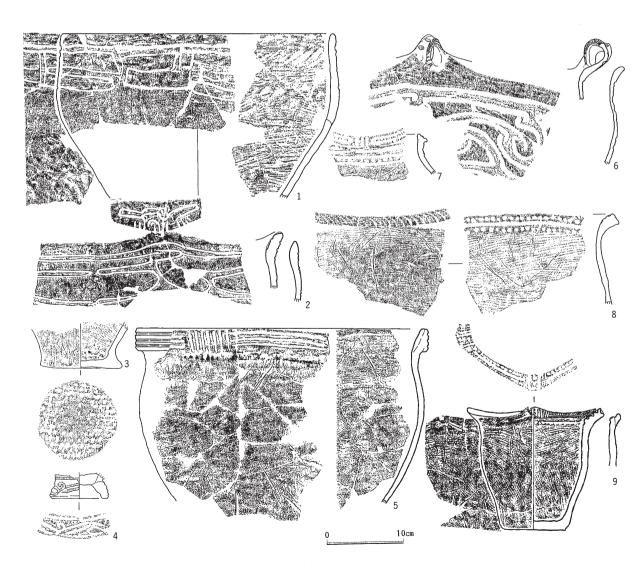
# 資料の所在

出土遺物は,鹿児島大学法文学部考古学研究室に 保管されている。

## 参考文献

本田道輝1983「田中堀遺跡出土の口縁部上面施文型の土器について」『鹿大史学』第31号鹿大史学会本田道輝1997「田中堀遺跡調査の概要」『川辺町郷土史追録』川辺町

(本田道輝)



第3図 田中堀遺跡出土土器